

本品は静岡大学の斎藤教授も採集（年月日不詳）しておる為、両者協議の上学名を考究することになっている。

註 以上のうち、キバナメドハギとシナノサラサケマンは、東京農業大学教授林弥栄林学博士にお願いして研究していただき、その結果を北陸の植物22巻1号に、日本産植物新報知として発表していただいた。同氏に厚く御礼申し上げる。他の七品は静岡市の杉本順一氏に依頼して研究していただいた。すべての研究が終り次第、同氏によって正式に発表される筈である。同氏に深く感謝するものである。

シロバナヒメオドリコソウ *Laminm Purpureum* L. form. *albifloram* GOIR
帰化植物、母種の出産地は欧州。その白花色。長野市篠ノ井有旅にて。昭和49年4月23日。峯村まさ氏採集。県下では初採。

ミドリツルニンジン *Codonopsis lanceolata* TRAUTVETTER form. *emaculata*
HARA

ツルニンジンの花冠内無斑 東筑摩郡波田町にて。昭和49年9月23日。横内文人採集。

ミヤガラシ *Rapistrum rugosum* (L.) ALL.

帰化植物 長野市篠ノ井にて、峯村まさ氏採集。欧州原産。

シロバナトウゴクミツバツジ *Rhododendron Wadanum* MAKINO form. *leucanthum*
HARA

諏訪郡富士見町とちの木。樋口平氏宅栽培。ハケ岳連峯中の西岳より十数年前同氏岳父が移植。

オオハクウンラン *Vexillabium fissum* F. MAEKAWA

北佐久郡軽井沢町長倉国有林にて、昭和49年8月27日。野溝竜太郎氏採集。

野溝氏が生本を送って下さった。北村四郎博士の著書「原色日本植物図鑑」の単子葉類と照合したところまったくピッタリだった。殊に最大の特徴と見られる唇弁の先は下垂し横にひろがった四角形で、先は浅く二裂する点など明瞭であった。後に原寛博士の高著「軽井沢の植物」によると、同博士は、これより先に採集されている。標本を恵与された野溝氏とミヤガラシ等を採集された峯村氏に厚く御礼申しあげる。

梓川下流におけるケシ ヨ ウ ヤ ナ ギ

第1報 分 布

横 内 文 人

F. Yokouchi : Biology of *Chosenia arbutifolia* A. Skav.

at down the river Azusa I. Distribution

I はじめに

ケシ ヨ ウ ヤ ナ ギ *Chosenia arbutifolia* A. Skav. はヤナギ科に属し、一属一種である。

その分布が極限されていることによって広く知られている。また冬～春にかけて新枝に白ろうを帯び、葉は粉白色で美しく、その名の如く化粧する。本州において上高地のケシウヤナギは、余りにも有名である。この梓川下流のケシウヤナギは、低所分布地として研究されたこともある。

私は昭和47年から島々谷(南安・安曇村)、梓川下流のケシウヤナギの分布、林冠構造、植生等を把握すべく調査を進めている。本報は第1報として分布状況について述べる。

本報告に当り、調査に御協力いただいた松本市女鳥羽中学校・松田行雄氏、不明標本の同定や、49年3月に現地指導をいただいた父、横内斎氏、昭和49年特殊研究補助をされた信濃教育会に對し厚く御礼申しあげます。

また校務の傍ら調査の機会を与えられた東筑摩郡波田小学校・牟礼儀一前校長先生、小林正年校長先生、服部忠彦教頭先生らに感謝致します。

II. ケシウヤナギの植物分類学上の位置とその分布

日本のヤナギ科 Salicaceae は、ハコヤナギ属 *Populus* , ヤナギ属 *Salix* , オオバヤナギ属 *Toisusu* , ケシウヤナギ属 *Chosenia* の4属に分類される。他に属間雜種によるカミコウチャナギ属 *Toisochosenia* がある。

このうち、ケシウヤナギ属は、花は通常腺体がなく、風媒であることが著しい特徴である。小枝は白粉で被われ、冬期美しい紅色を呈する。この白粉は新芽のふく頃よりだんだんにうすれてくる。本属はケシウヤナギただ一種だけである。またヤナギでありながらさし木、種子による発芽もなかなか困難である。冬芽は枝に密着し、先端は尖る。

ケシウヤナギの分布は東亜に限られており、東シベリア、オホーツク沿岸地方、樺太、朝鮮と日本である。即ち日本海沿岸地方を主とする。日本列島がアジア大陸に続いていたころ分布したものとわれ、環日本海要素という説もある。

日本におけるケシウヤナギの分布は、北海道と長野県のみである。北海道では日高地方の猿留川、十勝地方では十勝川とその支流(佐幌川、然別川、芽室川、音更川、利別川、戸蔭別川、札内川、猿別川)、日方川とその支流、豊似川、広尾である(西沢1967)。長野県では梓川水系のみに限られており、上高地(一の俣～上高地)、島々谷大曲り、梓川の下流・新淵橋～梓橋間に分布している。なお鳥川一の沢にも大木が1950年発見されたが、1959年秋の大水で流失した(寺島1973)。また豊科町熊倉のものも最低所分布地として注目されたが今はない。

このように、本種は日本においては北海道中央南部と梓川流域のみという隔離分布をしている。これは北方系植物の南下を許した気候の存在と逆に温暖になってこれらの地にとり残されたことを物語り、隔離分布の好例として認めねばならぬ。

III. 梓川水系のケシウヤナギ研究史 一主に下流一

○1927年(昭2)7月 中井猛之進氏 内務省委嘱・上高地植物調査の折、上高地温泉前の川原でケシウヤナギを発見。

- 1927年(昭2)11月 木村有香氏 上高地に入り、ケシウヤナギの研究。
- 1928年(昭3) 木村有香氏 波田町赤松の梓川で調査するも発見できず。
- 1949年(昭24)3月 山崎林治氏 波田町前淵(新淵橋下)でケシウヤナギを発見。
- 1950年(昭25)4月 浅川百合治氏(穂高町牧) 鳥川一の沢(標高1400m)で老大木(樹高12m, 胸高周囲60cm)を発見、同年10月寺島虎雄氏、等々力亀一氏調査 1959年(昭34)秋流失す。
- 1951年(昭26)5月 小林富雄氏 豊科町高家熊倉(梓川・奈良井川合流点近く、標高約560m)で38本発見。
- 1957年(昭32)7月 寺島虎雄氏 小林富雄氏 前淵河原で127本確認。最高7m, 径27cm, 平均樹高3.2m, 径約40cm。
- 1960年(昭35) 内田信太氏 前淵河原で樹高4~6mのもの13本、若木(1~2m)を10本確認、八景山地籍、中州で約20本確認。
- 1960年(昭35)4月 内田信太氏 島々谷大曲りの中州で11本発見 この2km上流でも2本発見。
- 1965年(昭40) 倉田弘道氏(当時三重大生) 梓川前淵より花見内の分布図作成、熊倉で10本確認(内5本は完全枯死、他の5本も枯れ始め)。
- 1968年(昭43) 西沢啓治氏(当時三重大生) 島々谷大曲り(140本)、新淵橋下(2本)、熊倉(倉田氏当時のもの2本と他に3本)を調査。

IV. 梓川下流における分布状況

島々谷と新淵橋~熊倉まで分布状況を調査した結果、第1図のようになった。梓川の出水や人為によって過去の調査報告とは、ずい分と分布地が変わってきている。これは、ケシウヤナギが流れのある地下水を要求するため、出水時に冠水されやすいところに生育するためである。また人為による河床の掘り下げにより、地下水位が変動し枯死してしまったことにもよる。なお枯死木の輪切りによって年輪厚を調べてみると、周辺部で約4mmであった。このことから本種は、他のヤナギ同様生長のよい木であるといえよう。

では何故亜高山帯に分布するケシウヤナギが、梓川上流(上高地)~下流にかけて分布しているのだろうか。それについて寺島(1973)は次のように説明している。

イ、河川の流れが大部傾斜がゆるやかな広くひらけた河原、または中州であること。

ロ、基盤は腐葉土と砂礫の堆積で、これがヤナギに好適な和合度となる点。

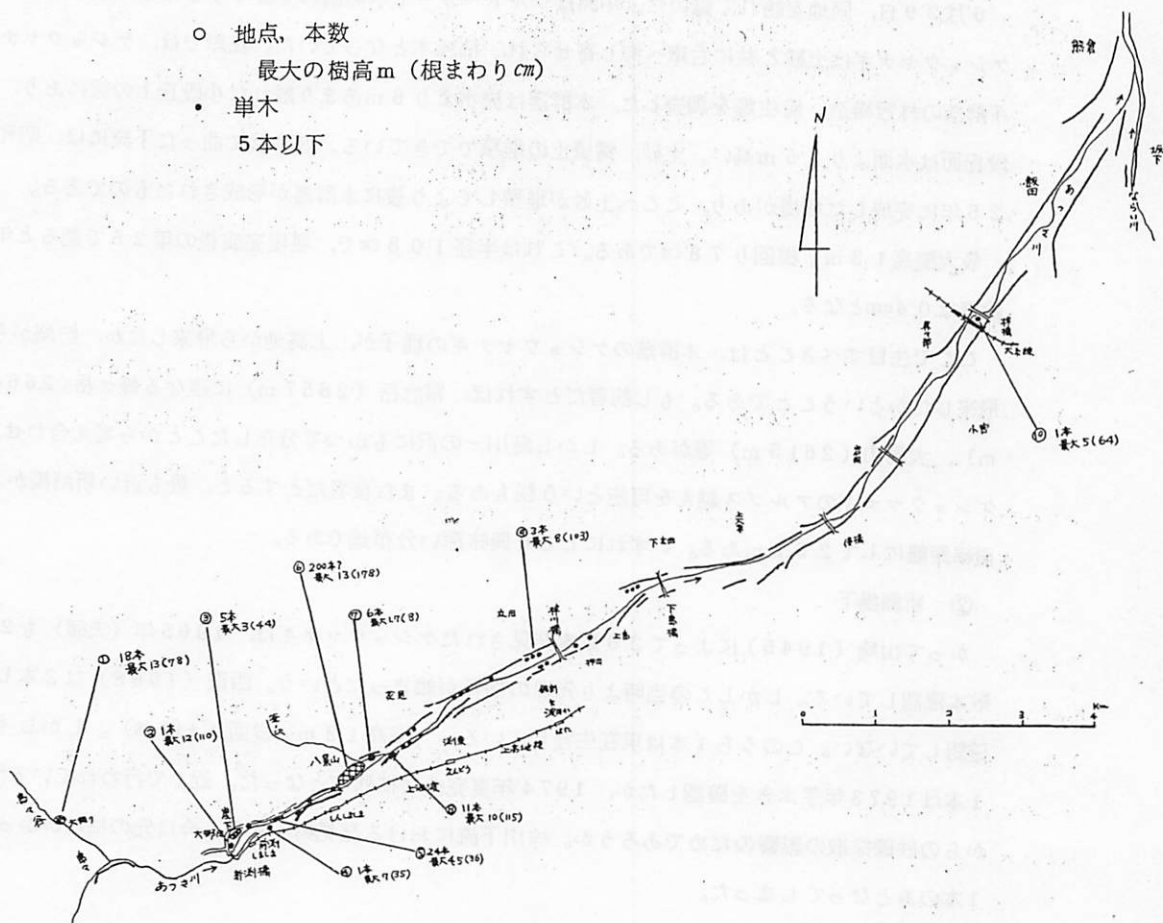
ハ、日光を充分受け得られ、障害物のないところ(受光性が他のSalixより強大なため)である。

なお、私はこの他に地下水の影響が大きいと考える。過去の分布地であって現在皆無になったり、数の減少しているのは皆人為によって河原の土石類の掘り取り等で地下水位に変化をもたらしたか

らである。よって、ケシ ヨウヤナギの保護のためには土石類の採取を禁止せねばならぬと思う。

梓川下流におけるケシ ヨウヤナギの分布

- 地点、本数
最大の樹高m (根まわりcm)
- 単木
5本以下



① 島々谷大曲り (番号は 地図と対応)

島々宿より島々谷を約1km登る。つり橋下の中洲と左岸 (文中いずれも上流より見て) にある。私は49年5月3日ここを訪れたが、雪融け水は冷たく、意外に流量が多いので中洲の調査はしなかった。左岸におい



島々谷大曲りのケシ ヨウヤナギ (49.5)

て18本のケシウヤナギを確認した。中洲においても樹高6mぐらいのものまで含め10本以上確認した。

6月29日、同地を訪れて驚いた。中洲はブルドーザーで水の流れをよくするために取り払われケシウヤナギは土砂と共に右岸へ押し寄せられ、枯死木となっていた。左岸では、ケシウヤナギ群落の林冠構造、植生等を調査した。本群落は流水より6mあまり離れた小段丘上の縁にあり、段丘面は水面より1.5m高い。土砂、腐植土の堆積でできている。S字状に曲った下流には、昭和25年に完成した堰堤があり、ここへ土砂が堆積してより後に本群落が形成されたものである。

最大樹高13m、根回り78cmである。これは半径10.8cmで、堰堤完成後の年25で割ると年輪厚は0.4cmとなる。

ここで注目すべきことは、本群落のケシウヤナギの種子が、上高地から飛来したか、前淵から飛来したかということである。もし前者だとすれば、常念岳(2857m)に連なる蝶ヶ岳(2664m)、大滝山(2615m)等がある。しかし烏川一の沢にもかつて分布したことから考え合わせてケシウヤナギのアルプス越えを可能という説もある。また後者だとすると、最も近い新淵橋から直線距離にして2.5kmある。いずれにしても興味深い分布地である。

② 新淵橋下

かつて山崎(1945)によって20数本発見されたケシウヤナギは、1965年(矢頭)も20数本確認している。しかしこの当時より先端の枯死が始まったという。西沢(1968)は2本しか確認していない。このうち1本は現在生育している。(樹高12m 根回り110cm)。しかしもう1本は1973年芽ぶきを確認したが、1974年夏完全な枯死木となった。近くで行われている河床からの砂礫採取の影響のためであろうか。梓川下流における発見第1号も、今は先の枯れかかった1本のみとなってしまった。

③ 梓川村崖の下

大野田～八景山間の道路下、西沢(1968)は樹高2～5mのもの50本を確認しているが、現在は最大樹高3m、根まわり44cmを含め5本のみである。

④ 前淵河原

寺島と小林(1957)は127本確認しているが現在は不動堂下の1本(♀、樹高7m、根回り35cm)のみである。ハリエンジュの林内にあり、その下流に樹高3m(♂)が1本ある。

⑤ 大野田～八景山中間点

最大4.5mを含め24本が生育している。その下流に2本の幼木がある。

⑥ 八景山河原

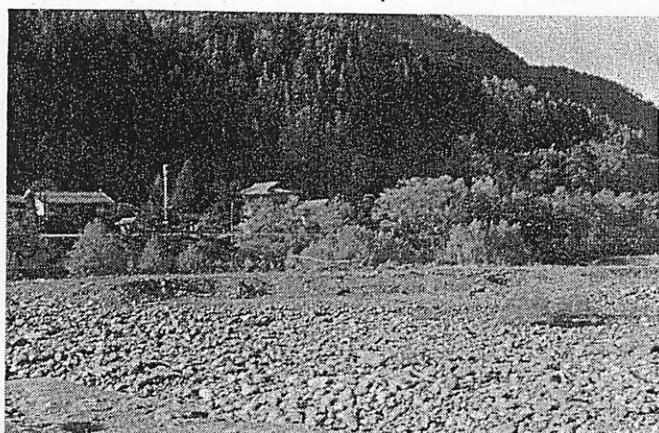
現在、梓川下流で最大の群落を形成している。その数は200本はあろうか。上高地線新島々駅のはば対岸で、赤松旧頭首工の下である。この群落は、堰堤の完成によって、大水に被われることがなくなったので形成されたものであろう。最大は13m(根まわり178cm)であるが、樹高・太

さからみて、新淵橋下の
ものとはほぼ同時期のもの
と想像される。これは一
段高い段丘上にあり、他
は6 m以下の若木である。

⑦ 釜の沢合流点

幼木が6本見られる。

最大は1.7 mで下流にやは
り幼木6本が点々と見られる。



八景山のケショウヤナギ林 (49. 4)

⑧ 上海渡下

最大11 m (根まわり115 cm)を含め11本がある。波田町側では最大の群落である。他のヤナギ類も含めてヤナギ林を形成している。川床より一段高い土手の上にある。下流に3本あり。

⑨ 梓川橋上

最大8 m (根まわり103 cm)を含め3本が見られる。虫害が始まっている。枝の伐採の跡がある。対岸には幼木が2本ある。このうち1本は河川工事のため枯死してしまった。梓川橋～下島橋間の左岸に3本、右岸に2本見られるがいずれも幼木である。

⑩ 梓 橋

国鉄大糸線と国道の両橋のほぼ中間の中洲に1本あり、双方から遠望できる。樹高5 m (根まわり64 cm)で、枝はほぼ円形に広がる。現在梓川最下限のものであり、豊科町で次のような立札をして保護している。「天然記念物 化粧柳 この柳は日本本土には上高地と当地に(この下流に三本)しか発見されていない貴重な植物につき保護してください。豊科町教育委員会」なお、下枝は取り木がしてある。

V. 摘 要

島々谷と梓川下流におけるケショウヤナギの分布状況について報告した。1949年新淵橋下で発見調査されてより、分布地にかなりの変動がある。またその数を著しく減じたり、熊倉のように皆無になってしまったところもある。最大群落は八景山河原であり、最下限は梓橋である。分布上貴重な柳である故、関係の安曇村、梓川村、豊科町、波田町で積極的な保護を望みたい。

VI 参考文献 (図鑑・検索誌等は略す)

- 横内 斎 (1964) 中信地方において分布上注意すべき植物(3) P.3~4 長野林友 9月号 長野営林局
 宮脇 昭 (編) (1967) 原色現代科学大辞典 3 — 植物 学習研究社
 西沢啓次 (1967) ケショウヤナギの分布と生態について (三重大学農学部卒業論文) (未発表)
 寺島虎雄 (1973) 梓川流域に分布するケショウヤナギの話 山と博物館 (北アルプス博物誌Ⅱ・植物・地学 P 67 ~ 72) 大町山岳博物館
 松田行雄・横内文人 (1973) ケショウヤナギ (波田の植物 Ⅷ 8) 波田公民館報 258号 (1973年3月号) 付分布図。